

長南町に伝わる郷土玩具「芝原人形」あれこれ

芝原人形とは

型抜き製法により作られる土人形で、明治時代初頭から昭和40年代初頭まで長南町芝原の田中家で製作されたため「芝原人形」と呼ばれています。

土製の抜型を使って型抜きした粘土を窯詰めし、約800℃の低火度で焼き上げた後、胡粉で下地を塗ってから泥絵の具で絵付けをして完成させます。人形の中にはあらかじめ粘土玉が入れられているので、振ると土鈴のようにカラカラと音が鳴ることから『石ころ雛』とも呼ばれていました。昭和46年（1971）に千葉県無形文化財であった三代目・田中謙次の死去により一時廃絶しましたが、昭和57年（1982）に千葉惣次の四代目継承によって復活し、現在に至っています。

芝原人形の誕生

芝原人形創始者・田中金造（号は錦山）は弘化元年（1844）に芝原村で生まれました。博学多才の人物であり、錦山の次男・田中謙次によると、今戸人形をモデルとして型詰めや焼成技法を瓦職人に、絵付けを画工に学んで、独自に製品を完成させたといいます。

ひな祭りと芝原人形

千葉惣次によれば、旧上総国内である当地方ではひな人形として今戸人形の需要が高く、そこに在地産の土人形が入り込む余地があったのではないか、といいます。錦山が農閑期の仕事として、ひな祭り用の土人形作りに目を付けたことも彼の多才ぶりを物語っており、実際に芝原人形はこの地方のひな人形として定着し、最盛期の明治30年頃には年産約2万点を数えたと伝えられます。当然、田中家だけでは生産が追いつかず、近隣の農家が型詰めを下請けし、錦山は2人の息子たち（二代目・春吾、三代目・謙次）と共に、人形に絵付けを施して完成させていたと言います。

かつて、この地方の人々は木箱や机などに赤い毛氈を敷いたひな壇に芝原人形や鴻巣の練人形などの人形を並べ、ひな祭りを祝っていたといいます。人形の種類や並び順に規則性はなく、なんでも自由に飾っていたようです。また、ひな祭りの日には子どもたちがこうした人形と食べものを持って裏山へ登り、みんなで歌って遊ぶ風習もあったといいます。

芝原人形の販路

田中家時代の芝原人形は20数名もの売り子が近郷の各戸を巡り歩いて販売していました。また、かつて長南で開かれていた六斎市にも、ひな祭りが近付くと出店していたといいます。長南の六斎市は戦中に途絶え、近郷に売り歩く姿も昭和30年代に消えてしましましたが、現在の窯元である千葉惣次も「季節もの」として、毎年2月下旬に自宅工房で芝原人形の展示即売を行っています。

人形に残る明治

もともと芝原人形は、江戸浅草の今戸人形をベースに生み出されたものであり、江戸情緒を偲ばせる作品が多いのですが、錦山は明治時代の世俗を偲ばせるモチーフの作品を多く創出しています。特にメインユーザーである女児の好みを反映してか、女性型人形の場合は流行の服装や髪型、流行のアイテムを持たせた女性、女学生や女性教師など新時代を象徴する

女性像など多くのバリエーションが存在します。ただし、庶民層のスタイルを映すことが基本となっており、上流階級の女性が鹿鳴館に着ていくようなドレス姿は、いかにも少女たちが憧れそうなのですが、なぜか作例は見られません。

芝原人形と洋傘

芝原人形には「洋傘を持つ花嫁」など、現代の感覚では不思議に思える組み合わせもあります。また、「花嫁」のほかにも和服で洋傘を持つ女性をモチーフとするものが複数見られます。洋傘が日本に入ってきたのは19世紀後半で、明治20年代前半には輸入品より安価な国産品が出始めましたが、当時の女性たちにとってあこがれのハイカラアイテムであり、こうした時代背景を物語っているのでしょうか。

芝原人形と動物たち

特に種類が多い狆（ちん）は日本原産の小型犬で、江戸時代には愛玩犬として高い人気を誇っていました。狆人形の型は伏見人形で意匠化され、その後今戸→芝原と受け継がれたといいます。そのほか、「桃持ち猿」は京都の伏見人形、「鷹」は山形県米沢の相良人形、「鯛」は菓子屋の菓子型が基とされます。「桃持ち猿」は長寿を象徴する題材であり、中国に源流があるといいます。また、郷土玩具研究家の石井車偶庵は「鷹」について、この地方で盛んであった出羽三山参詣との関連性を推定しています。

芝原人形と内裏雛

かつてはひな人形として需要が高かった芝原人形ですが、田中家時代からある男女一対の「内裏雛」はそう多くありません。芝原人形を代表する作品として知られている分銅形の「内裏雛」は、人形作家の佐久間玲甫による原型から田中謙次が抜型を起こしたもので、数少ない田中謙次のオリジナルです。「袴雛」は今戸人形からある伝統的な型で、江戸時代の農家の嫁入りの様子を題材にしているといいます。

芝原人形の読みは「しばら」？「しばはら」？

「しばはら」と「しばら」ではどちらが正式名称か？という質問を受けることがあります。実はこの地方の訛りで「しばはら」と発音すると「は」の子音「h」が曖昧になり、「Shibara」（しばあら）と聞こえます。芝原人形が隆盛を極めていた明治～大正期には芝原人形流通圏の人々はほぼ誰でもこのように発音していたことから、千葉惣次は芝原人形の時代性を重視して「しばら人形」と銘打っているといいます。ただし、「しばあら」と発音する世代の人たちに対して「しばはら」と発音しても“まちがい”とは指摘されません。つまり、「しばあら」は発音上の問題であり、地名としての認識は「しばはら」ということであり、したがって、どちらが正式名称ということではなく、どちらも正しいと言えるでしょう。

四代目・千葉惣次

高校生の頃、祖母がひな祭りのたびに大事に飾る土人形に興味を抱き、その作者・田中謙次のものと訪れては少しづつ人形を買い求めたといいます。その後、郷土玩具に惹かれて研究をする一方で、岐阜県多治見にて陶芸家としての修行を始めましたが、昭和57年（1982）、廃絶していた芝原人形復活を強く望む石井車偶庵の厳しい指導の下で芝原人形の製作技術を習得し、四代目継承を田中家から正式に認められました。現在は長南町岩撫に工房を構え、田中家時代からの作品に加えて、自身のオリジナルも多く創出しています。